

4階「こども図書スペース」事業計画（案）

1 「こども図書スペース」概要

- (1) 小学生を中心に、未就学児やその保護者、5階の中高生等の居場所との連携も想定し、子どもたちが一人でも、複数でも、安全・安心に楽しく過ごせる場所を目指します。
- (2) 調べ学習に役立つ資料から人気の本や漫画までそろえ、本との接点を提供します。図書の貸出は行わず、読みたい本がいつでも本棚にあり、フロア内の好きな場所で読むことのできる環境を整備します。また、本をきっかけとした子どもたちの活躍の場や交流の機会を創出します。
- (3) 子どもの発達や学びには「遊び」が重要であるとの認識のもと、「遊び」から主体性や社会性を身に付けたり、知的好奇心を引き出すことのできる環境を整えます。
- (4) 主に小学生やその保護者からの意見聴取を行い、計画に反映させます。また、子どもたちが当事者意識を持ち主体的に関わることができる仕掛けを取り入れます。

2 基本的な考え方

(1) 安全・安心な放課後等の「居場所」の提供

安全・安心な放課後等の居場所となるには、来場へのハードルが低く、一人でも行きやすいだけでなく、一人で居ても気にならず、何度でも行きたくなることが重要と考えます。

このため、利用は無料として、土日も開場し、入口は入りやすい雰囲気とすることで、子どもたちが来場しやすい施設とします。

また、必要に応じた一次的な相談支援機能を確保します。

安全対策として、職員の巡回や防犯カメラの設置、低い本棚を配置することで死角を少なくします。また、登録制として、利用者は必ず受付カウンターを通るレイアウトとします。受付カウンターには、「こども図書スペース」の顔となるフルタイム職員や、勉強や遊びをサポートするスタッフを配置することで、安心感を醸成し、子どもたちの居場所としての機能を確保していきます。

子どもたちが多様な過ごし方を選べることも重要です。座席やスペースの区切り方に工夫を凝らすなど、一人でもグループでも、様々なニーズに対応できる空間づくりを行います。

(2) 「本との接点」の提供

身近な場所で本と親しむ環境を整備し、子どもと本との接点を増やす取組が求められています。「子ども図書スペース」では、選書や配架の工夫をするとともに、貸出は行わず、読みたい本がいつでも本棚にあり、フロア内の好きな場所で読むことのできる環境を目指します。

徒歩 10 分程度にある図書館本館や、子どもたちの身近にある学校図書館との差別化を図ることも重要です。

本との接点を創出するため、例えば、好きな姿勢で読めるスペースや籠れるスペースなど多様な読書空間を演出することで、本と向き合える環境を整備します。

また、本への興味を持つためには、夢中で本を読んでいる子どもの存在も大切であると考えます。そのために、本好きな子どもが集まる仕掛けを検討します。

例えば、企画展示や図書のメンテナンスを行ったり、こども司書が一部の本の選定にかかわることで、本をきっかけとした、子どもたちの活躍の場・交流の場を創出します。

一人で静かに読書できる場所を確保するために、入口側に近いエリアを「動のエリア」、奥側を黙読や学習のための「静のエリア」としてレイアウトします。

(3) 「遊び」を通じた「学び・交流・創造」の機会創出

子どもの発達には「遊び」が重要であり、子どもたちにとって「遊び」と「学び」は一体的なものであると考えます。また、遊びや体験活動から子ども同士の交流が生まれる場面も見られます。このことから、「遊び」を通じて、主体性や社会性を身に付けたり、知的な好奇心を引き出すことのできる環境を整えることが大切であると考えます。

そのために、「与えられた場所」「楽しませてもらう場所」ではなく、「自ら楽しむ場所」「自分たちの居場所」になるよう、子どもの主体的な行動を引き出す仕掛けづくりを行います。

例えば、子どもたちによるランキングやギネス記録などの競い合いができるようなイベントや、得意分野を教え合ったり、同じ趣味や興味を持つ子どもたちが集まる仕掛けを取り入れるなど、子ども自身が好きな活動ができるよう支援します。これらの活動支援は、子どもたちが自己肯定感や自己有用感を育むことにつながるものと考えます。

さらに、子どもの知的好奇心を引き出すために、図鑑や地図、地球儀、顕微鏡など実験器具を置いたり、工作用の工具や大判プリンターを用意したり、科学やプログラミングなどの講座を開催するなど、「学びのきっかけづくり」を検討します。

(4) 未就学児と保護者に向けた「本との接点」の提供

「こども図書スペース」における未就学児スペースの役割は、①親による読み聞かせを通じて、親子のきずなを深める、②おはなし会を通じて、社会性を身につける、③子どもが自ら本を選ぶ経験をする、の3点とします。

そのためには、定番の絵本や近年出版された人気の絵本を配架し、親による読み聞かせやボランティア等によるおはなし会の実施なども検討します。なお、おはなし会については、4階以外の他フロアでの開催も検討し、施設全体での連携を図ります。

未就学児の利用を前提にした安全対策も求められます。小学生が走り回っても未就学児と接触しないよう、小学生以上の利用するスペースと未就学児スペースを区切ります。未就学児が利用するスペースは、クッションフロアと子どもを見守る保護者用のソファを基本に、子ども自ら本が選べるように背の低い本棚を置きます。また、ベビーカー置き場も確保します。

(5) 他フロアとの連携

4階から5階は「居場所機能」を中心とした場所となるため、フロアごとの目的や機能を確認しつつ、相互に連携することで、各々の目的が効果的に達成されるように工夫します。

それぞれのフロアの利用者同士の交流も促進し、異年齢間でのつながりが広がるような取組も進めていきます。

また、他のフロアとも連携を意識した取り組みを進め、施設全体として一貫性のある取組が展開できるよう検討します。

(6) その他

「こども図書スペース」における利用規則は最低限なものとし、開場後に、有志の子どもたちで「こども事務局」を立ち上げるなどして、大人のアドバイスのもと、この居場所の当事者である子どもたちが自主的にルールづくりに関われる仕掛けを検討します。